と、認めあつた。

頼綱は直に日蓮に向つて、其由を告げたが、日蓮は別に喜ぶ色もなかつた。さはれ法弟檀越の喜びは、如何であつた乎。そは寧ろ想像するに餘りがある。

三九　明星降下

時は九月十三日。日蓮は本間左衞門重連の別邸にあつて、徒然なるまゝ、後の明月を仰いで、自我偈を誦しつゝあつたが、巨星忽然天より墜ち來つて、庭前の梅樹にかゝつた。と見るや、警固の士卒は、その赫灼たる光明に眩み、或は倒れ、或は轉び、甚しきは椽下に墜落した者もあつた。折しも馬に鞭つて馳せ來つた鎌倉殿の傳令使は、日蓮に對し、佐渡流罪の牒狀を齎し來つた。

日蓮は諸天善神の庇護によつて、其死を免がれたが鎌倉に殘せし、法弟檀徒の上を思ひやつて、一日も安き心はなかつた。

さきに日蓮の召捕らるゝや、妙宗の法類は、同時に捕縛せられたが、以來鎌倉の地は、放火、辻斬の徒各所に出沒し、人心恟々として、何れも其堵に安じなかつた。奉行は始め、之を以て妙宗一派の所業だと信じ、全力を擧げて之を捕へて見ると、こは何事ぞ。日蓮に惡名を被せむとする他宗末派の惡所作であつた。仍て奉行はその無辜を憫み、一回の審問も無く、直に其檀徒法弟を赦免した。

四〇　佐渡流罪

日蓮の依智鄕にあること一個月餘。十月十日いよ〳〵佐渡に送らるゝ流罪の身となつた。日蓮は其前夜、土牢の中に幽せられた日朗の上を思ひやり、一片

の書狀を認めて之を送つたが、師弟の情誼濃やかなる、見る者一人として泣かざるはなかつた。

かくて二十一日の夕刻、越後の國三島郡寺泊に達した。天候不穩の爲め、渡航を見合せ、數日の間、錫を停めて敎化を施し、二十七日海波の收まるを待つて、漸く此地を出帆することゝなつた。こゝまで送り來れる法弟、檀越及び忠僕はいたく別れを惜しみ、師の船の沖に消ゆるまで之を見送り、涙ながら唱ふる題目の聲は、波の音に交つて、長き恨みをのこすのであつた。

あゝ死生命あり、苦樂時ありと雖、佐渡の配所に、憂き年月を送れる日蓮の苦難を察すれば、恐らく何人も、同情の涙を禁じ得なかつたであらう。

風帆早くも北海の浪を截つて、洋心に出でた頃、風位俄かに變じ、狂濤澎湃として、舟體動搖し、舟子の腕も今ははや疲れて、唯運を天に任せつゝ、舟を遣るより外はなかつた。

軈て着いた岸邊は、蒲原郡角田の濱であつた。

日蓮はとある、斷崖の巖に題目を識るして、風波の鎭靜を祈つた。かくて、二十八日、又もや舟を艤して、やつと漕出したが、逆風俄かに起りて、舟は木の葉の漂ふが如く、舟體今にも覆らんとして、人々生きたる心もなかつた。日蓮は、かくと見るより、舷頭に立つて、經文を誦し、其日の暮方恙なく、佐渡の羽義郡松ヶ崎なる甲の瀨に着いた。

かくて只一人、渡頭に放たれたる日蓮は、人の無情を怨まんともせず、夜の暗路を探りつゝ、或は木の根、岩の根に躓きながら、辿り行く中、とある神職の家近く着いたので、此に一夜の宿を請ひ、翌日、漸やく加茂郡新穗なる本間六郎左衞門重連の邸に着いた。

四一　塚原の苦難

怒る風。狂へる波。凍る雲。積る雪。北海の冬は荒涼として、日蓮の運命を更に更に虐げんとするのであつた。時は十一月朔日、日蓮は愈塚原の配所に移されることゝなつた。

堂とは名のみ、全く破家で、暖を取らんに薪なく、口を糊するに米鹽なく、或は降り積む雪を笠に防ぎ、身にしむ寒さを簑に防ぐ外、何ものもない、惨憺たる小堂の中に、糧を送る人もなければ、衣を寄せる人も居ぬ。纔かに雪を掬ひ、氷を砕いて、渇を醫し、數日の間、日夜法華經を念じ、題目を唱へて、其日其日を侘しく送り迎ふのであつた。

されど日蓮は、一切の苛責と一切の奇難とは、悉く法華經の爲めのみと思ひ決め、殊には法敵、東條左衛門、極樂寺の召覲、建長寺の道隆、原左衛門尉、相模守殿を我が爲めの提婆達多と心に銘じ、只管法華經の爲めに盡さんことのみ心に深く期するのであつた。

ある日、一人の入道堂上に音訪れて、日蓮を睨みつゝ、某は念佛の行者なるが、法華經のみ成佛して、他宗に得道せぬ理由は如何と、舌鋒鋭く質問の矢を放つた。

日蓮は心得顔に、妙宗の正意を說き諭せば、彼は即座に改宗して、忽ち妙宗に歸伏し、其妻も亦化導を受け、之より後は、人目を憚りつゝ、衣食の供養を怠らなかつた。これ妙宗の存せむかぎり、其名を傳へらるべき爲盛夫妻其人で夫の法號を阿佛坊日得と稱し、妻を千日尼と呼んだ。

四二　陰謀と宗論

時は文永九年の春。豫ねて日蓮を憎むこと甚だしき此國の念佛、禪宗の僧侶達は、悉く新穗に集まりて評議を凝らし、一日も速かに法敵日蓮を除かんことを企てた。かくて愈日蓮を殺害することに決定し、一先づ問答によつて、日蓮を喝破せんとて、總勢數百人、正月十六日、愈塚原の草堂に押寄せた。

聽て問答に移り、一僧まづ眞言亡國の證據を問ふたから、日蓮は、或は經文に照らし、法理を引いて說き示し、あらゆる質義に對して、一々之を論破し、駁擊する其學殖の深遠なるに、辟易し、暫らくは敗け惜みの罵聲のみ、其處此處に、力なく起るばかりであつた。

是に於て、日蓮莞爾と微笑みつゝ、

『皆の衆、少しく耻を知り、分を知らば、今より日蓮に歸依せられい』

と呼ばはるに、忽ち怒つて坐を立つもあり、或は即座に改宗して、歸服する者も多かつた。

此日蓮は、重連に向つて、鎌倉出府の期を尋ね、更に出陣の用意せらるべき旨を諭したるも、重連は其意を得ず、新穗の邸に立ち歸つた。かくて鎌倉よりの消息を見るに及び、忽ち色を失つて、塚原に馳せつけ、日蓮が先見の明あるを驚嘆し、更に妙法に歸伏せんことを誓ひ、直ちに舟を仕立てゝ鎌倉に向ふことになつた。

四三　日興訪れ來る

遙かに師の身の上を案じて、安き心もなかつた鎌倉の法弟、檀越の中、日興

は、わけて配所の難苦を思ふに堪へず、終に熊王と二人して、鎌倉を脱け出で、遙々佐渡が島に渡つたのであつた。

日蓮の喜びは譬へんにものなく、只々嬉し涙に掻暮れつゝ、あれやこれや、鎌倉の近況を聞いて、北條家一族の葛籐、東西兩地の内亂など、悉く佛識の明確なるに感じ、其使命の愈〻重且大なるを思はないでは居られなかつた。

一日、日蓮は一念新院（順德天皇）の御事を思ひ出でゝ、直ちに御陵參拜を思ひ立ち、阿佛坊に案内されて其御陵に詣で、無限の感慨に襲はれて落涙の滂沱たるを禁じ得なかつた。

『畏くも一天萬乘の君にして、逆臣の爲めに孤島に流寓せられ給ひ、終に寒煙荒草の中に、御遺灰を止めさせ給ふた御胸中の御憾は、果して何如であらせられたで御座らう』

と、低徊去るに忍びず、又しても心に潜む勤王の志勃然として起り來るのであつた。

四四　上行の身證

日蓮は、佐渡流謫以來、日本の存亡其雙肩に懸るを思ひ、自ら筆を執つて、其所思を述べ、茲に所謂『開目抄』一卷を著したのであつた。

『正法一ヶ年、像法一千年を過ぎて、末法の始めに、法華經の怨敵三類あるべしとは、敎主釋尊の宣はせ給へる所、今は即ち釋尊の滅後二千二百餘年。正しく末法の始めにあらずや。大地を指す指は外るゝとも、春に花は咲かざるとも、此佛識ヨモ違ふべきや。

見よや、我が滅後、正法一千年が間、我が正法を弘むべき人。二十四人次第

に相續すべしとは、釋尊の宣はせるところ、其言果して的中せざるか、一百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等、一分も違はずして出で給へるにあらずや。其的確此の如し。何ぞ末法の始めに、三類の怨敵を出ださゝるべきや。此事若しも相違せば、一經皆盡く相違せん。

今や佛語果して空しからず、三類の怨敵、既に國中に充滿す。彼等の爲めに惡口せらるゝものは誰ぞ。罵詈せらるゝものは誰ぞ。刀杖瓦石を加へらるゝものは誰が僧ぞ。法華經の行者あらば、必らず三類の怨敵あるべし。三類の怨敵既に在り。法華經の行者たるもの、何ぞ之れなかるべきや。其人何處にか在る。其人折々何處にか在る。

此經は、如來の現在すら猶ほ怨嫉多し。況や滅度後をやとは、法華經に示させ玉へる所。實にや釋尊は提婆に小指を傷ぶられ、又九横の大難に値ひ玉ふ。

不輕菩薩、提婆菩薩、師子尊者以下法華經の行者たり。一乘の持者たるもの、孰れか災厄に罹らざらん、日本に於て法華經の爲めに、災厄に罹れるもの、抑々何人なるぞ。

般泥洹經に曰く、善男子過去に曾て無量の諸罪、種々の惡業を作る。是の諸の罪報に、或は輕易せられ、或は形狀醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず。貧賤の家及び邪慳の家に生れ、或は王難に遭ひ、及び餘の種々の人間の苦報あらん。現世に輕く受くるは、斯かる護法の功德力に由るが故なりと、此經文の句句、皆日蓮の身に吻合せるにあらずや。

日蓮旃陀羅(屠兒)の家に生れて、法華經の事を行ず、衆俗には輕慢せられ、怨嫉せられ、官人には憎惡せられ、猜忌せられ、或時は惡口、刀杖の難に罹り、或時は流罪、死罪の厄に遭ふ。

所謂る輕易せらるゝとは、予が身なり。所謂る形狀醜陋とは、予が身なり。所謂る衣服足らずとは、予が身なり。所謂る飲食麤疎とは、予が身なり。所謂る財を求むるに利あらずとは、予が身なり。王難に遭ひ、及び餘の種々の人間の苦報あらん　謂ふもの、孰れか予が身あらざらん。

然らば則ち釋尊の附囑を受けて、末法に法華經を流布するもの、此日蓮にあらずして誰ぞや。

四五　謫居の移遷

一たび法華經に歸依せる本間重連は、深く日蓮の身を案じ、近藤小次郎信重に後事を託して鎌倉に去つたから、小次郎は日蓮の爲めに、風光明媚なる地をトして、草庵を結び、四月七日愈々日蓮を此に移した。

草庵の近くに一老松があつた。日蓮之に向つて經文を誦すること數日に渡つたが、ある日靈泉滾然として、其根下から湧き出で、其頃から、妙宗に歸依する者が、次第に其數を增して行つた。三類の法敵は之を見て、或は恐れ、或は憤り、或は嫉んで、百方之を除かんと苦心し、惡罵讒謗を搆へ、遂に訴狀を作つて、態々鎌倉に出で、武藏前司朝直に見えて、事を謀り、一通の下知を得て、佐渡に立ち還つた。

そこで、朝直の下知狀を受けて歸つた守護職は、直ちに近藤信重父子を禁錮に處し、獄中に投じ、國外に放つたから、人心恟々として、寧日なき有樣であつた。軈て重連は鎌倉より歸つて、いたく打驚ろき、事を謀つた諸僧を集めて、懇々其邪見を誨へ諭し、宗門は再び復活の喜びを讃するに至つた。

その中、長谷の土牢中に呻吟しつゝあつた法弟の日朗も、私かに役人に請ふ

て、佐渡に渡り、なつかしき師の坊に見えて、嬉し涙に咽びつゝ舊を懷ひ今を談つて、再び鎌倉の土牢に歸つた。

四六　本尊の建立

日蓮は釋尊、天台、傳敎及自身の三國師を以て法經華の正統と稱し、今や新たに佛門の大本尊を建立せんと志し、自ら筆を執て、大曼荼羅を書したのであつた。時に文永十年七月八日。かくして日蓮は妙宗の組織を配所に於て大成したのである。吾人は先づ今其說を日女鈔に聽くべきであらう。

『抑々此本尊は、在世五十年の中には八年、八年の間にも、湧出品より囑累品まで、八品に顯はれ給ふなり、さて滅度の後には正法、像法、末法の中に正像二千年には、いまだ本門の本尊と申す名だにもなし、何に況や顯はれ給はんをや。又顯はすべき人なし、天台、妙樂、傳敎等は、內には鑑み給へども、故こそあるらめ、言には出し給はず、彼の顏淵が聞きし事意にはさとると雖、言に顯はしていはざるが如し、然るに佛滅後二千年過ぎて、末法の始めの五百年に出現せさせ給ふべき由、經文赫々たり、天台、妙樂等の解釋分明也、爰に日蓮いかなる不思議にてや候はん、龍樹、天親等、天台、妙樂だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法に入つて二百餘年の頃はじめて法華弘通のはたじるしとして顯はし奉つるなり、是れ全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛、すりかたぎたる本尊也、されば首題の五字、中央にかかり、四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦、多寶、本化の四菩薩肩を並べ、普賢、文殊等、舍利弗、目連等を屈し、日天、月天、第六天の魔王、龍王、阿修羅、其他不動、愛染は南北の二方に陣を取り、惡逆の達多、愚癡

の龍女、一座をはり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神、十羅刹女等、加之、日本國の守護神たる天照大神、八幡大菩薩、天神七代、地神五代の神々、總じて大小の神祇等、體の神つらなる、其餘の用の神豈もるべきや、寶塔品に云く、諸の大衆を接して皆虛空に在く云々、此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列座の二界八番の雜衆等一人ももれず、此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて、本有の尊形となる、是を本尊とは申す也』

四七　赦免

○時は文永十一年二月八日の夜、赤衣の童子忽ち、執權時宗の臥房に現はれ、『日蓮を赦せよ』と、三たび呼びしと夢みて、ふと眠から覺めたのであつた。程なく出仕せる頼綱は、呼ばるゝまゝに、時宗の寢所に入つた。今曉不思議の夢を見たる旨告ぐるより、頼綱も、すかさず、『そは日蓮赦免のことではござらぬか』と問はれて、時宗、言を改め、實は綠衣の童子夢に現はれ來つて、聖者を赦せと申せし趣物語り、主從はハッと顔見合せて、打驚くばかりであつた。

頓て日蓮赦免の協議に移つた。議論紛々として、其不可を主張する者も多かつたが、終に赦免に決定し、越えて十四日、寺社職宿屋光則は、赦狀を受けて、土牢の中に在る日朗に其旨を告げると、彼れは久しく入牢中の疲憊を忘れて、天に歡び地に喜びつゝ、赦狀を携へて、直ちに佐渡の謫所へと立ち向つた。

かくて三月八日、漸やく佐渡の小木港に渡りついた日朗は、いたく困憊しきつて居たけれど、師を思ふ心に強く鞭うちて、後山の坂路に差掛つた時、あはれ遂に路傍の石によりすがらんとする途端、正體もなく打ち倒れたのであつた。

日朗は我に歸つて、人を求むる中、圖らず師の坊の法弟を其の家に送り届けて歸りを急ぐ日興に出會つた。二人は夢かとばかりに打驚いて、覺えず嬉し涙に掻き暮れたのである。程なく、日朗は日興に扶けられつゝ、草庵に辿りついた。日蓮の歡びは固より、法弟の喜悅は限りもなかつた。

其翌日、日蓮は日興を伴ふて、新穗の守護所に至り、本間六郎左衞門重連に謁して、鎌倉よりの下知狀を渡したのであつた。

重連は披見して、

『日蓮法師御勘氣事、所被免許候也』

と讀み上げ、實に流罪御赦免に相違なきを告げた。日蓮は今や、青天白日の身となつたから、一島の檀越、信徒に向つて直ちに此由を傳へた。法敵は、急に殺害の評議を凝らして、時の到るを待つた。

時は三日十四日、日蓮は愈々敎化の地に、信徒の人々と盡きせぬ名殘りを惜しんで鎌倉にかへる身の上となつた。隨ふは、日朗、日興、其他の法弟。かへりみる四年間の流罪。別れを嘆く敎化の人々、日蓮は只々はふり落つる涙に法衣の袖を絞りつゝ、十五日赤泊といへる港より、錨屋彥右衞門の供養した乘船に乘じて出發した。

危機は既に去つた。一帆風を孕んで、靜かなる北海の波をきつて、舟は矢の如く走るのであつた。

四八　歸府

柏崎に上陸した日蓮は、暫し泉甘に休憩し、府中の町に至つて、眞言宗朝日

寺に宿し、翌日信濃に入つた。此地の法敵は、いち早く其れと聞くより、集會を開いて、日蓮を要擊せんとしたので、領主村田大隅守、俄かに兵を遣はしてその危機に備へたのであつた。

かくて三月二十六日、日蓮は恙なく鎌倉の人となつた。顧みれば、龍の口の難ありてより四春秋、其間幾度か生死の境に出入したるも、今此地に立ち還つてなつかしき、法弟、檀越を首め、多くの信徒に迎へられた時、日蓮の感慨は果して如何であつたらう。日蓮は只歡極まつて暫しが程は言もなかつた。

四九　國諫三たび

元兵來寇の機を問ふ

四月八日執權時宗の命によりて、其邸に至れば、執事頼綱の態度古の傲慢に似ず、今は禮を厚うし、執權に代つて對面するのであつた。日蓮は頼綱が『愛染明王の別當に任じ、莊田、一千町を寄附するを以て、之より他宗の折伏をやめては如何』と申入れたるに對し、日蓮の口は塞ぐとも、釋尊の敎は枉ぐべからず』とし、次に蒙古襲來の機を問はれ、

『其時日は經文にも見え申さねど、今や上下邪宗に歸依して、正法を誹謗するにより、諸天善神皆怒つて、日本を見棄て、三災七難續いて起る儀なれば、自界叛逆の難も起り、他國侵逼難も、多分今年中に來るでござらう』

と言はれて、一座齊しく愕然。互に顏見合はするのであつた。

日蓮は更に語を次いで、

『若し正法の敎に歸伏して、謗法を謝し奉らば、諸天善神此國を守護し給ふのでござらう。さりながら、尙念佛、眞言、禪律などを篤信せられなば、日

本國は滅亡するに相違ござらぬ。このこと立正安國論に識し置いた一大事』と、舌鋒を揮つて、各宗の曲直を糺明し、信疑相半ばせる列坐の人々を說破せむとするのであつた。最後に日蓮は、

『天下衆生の爲を思はゞ、速かに邪宗を禁じて、正法を奉じ給へ、愛染明王の別當も、一千町の莊田も、日蓮には欲しうはござらぬ』

と言ひ放つたが、尙ほ未だ其言の容れられぬを看取し、つと立ちて、立ち還つた。

かくて狂僧罪すべしとの議は、說となりて鎌倉の天地に擴がつた。

雨乞と大風の豫言

此頃久しく降雨を見なかつたので、時宗は加賀法印に命じ、雨請の祈禱を行はせることとなつた。然るに、靈驗忽ち顯はれたるより、眞宗の人々は大いに打歎び、他宗を罵る日蓮も、遑がに顏色あるまじと、手を拍つて哄笑するのであつたが、日蓮は之を聞いて、

『善無畏も、不定も、雨請して雨を降らし、更に大風を吹かせたから、今に大風が起るで御座らう』

と、平然として、些か心に介する樣子もなかつた。偶々怪光天の一方に閃くよと、看々颶風忽ち大地を捲いて、山岳鳴動し、堂宇を奪ひ、人畜を倒して、阿鼻叫喚の聲、耳をも聾せんばかりであつた。

是に於て、法弟、檀越等齊しく師の坊の先見に驚嘆したのであつた。

五〇　妙宗の公許

三類の法敵は、尚ほ執拗くも、日蓮を嫉んで、此を除かんと謀つたが、時宗は寧ろ、妙宗のみを公許して、他宗を禁ぜんとさへ思つて居た位だから、容易に事を決しなかつた。

時は五月二日、時宗は終に法華經の弘通を許すべく、有司に命じて、日蓮の許に一通の宗牒を送つた。

『頃年、數多眞法の威力、御感尤を深し。三國比類なき妙宗、後代有難き尊僧、何の宗か之に比せん。日本國中に於て宗弘妨げある可らざる者也。仍て執達件の如し

文永十一年五月二日　　城左兵衛奉

日蓮大上人

斯くて、妙宗は愈天下に公許せらるゝに至つたが、日蓮は更に悅ぶ色もなかつた。

宗門の大鳳は、正に佛天活躍の時に立ちながら、尚且翼を收めて、懷龍の嘲を招くより、寧ろ山林に潛むに如かずとなし、徐ろに鎌倉退去の志を決めたのであつた。

五一　鎌倉の寺院

妙宗の勢力は益盛んになつて行つた。比企三郎能本は、其邸宅を擧げて法場とし、名を長興山妙本寺と命じ、自らは剃髮して、大巧院日學と稱し、日毎に日蓮の法話を請ふて、鎌倉に於ける寺院說法の嚆矢をなしたのであつた。更に小町の正覺の僧は、日蓮に說破され、寺院を開放して立ち去つたから、改めて此を大巧寺と言つた。且つ、寺社職の宿屋光則も亦、妙宗に歸伏し、長谷の

邸内に一寺を建てて、光則寺と命名し、自らは西信と號して、專ら妙宗の爲めに力むるに至つた。

斯くて、日蓮の法弟、檀越を首め、各地の信徒は、先を爭ふて、師の坊の來錫を仰いだが、就中、甲州波木井の鄕主南部六郎實長は、尤も切實に請ひ求めたから、終に其願を容れて、愈小町の草庵を立ち出づることになつた。時に文永十一年五月十二日。

五二　甲州の隱栖

日蓮は日興、日向、日頂、日持、日進、久本坊、及熊王等を隨へて、夥多の信徒に別れを告げつゝ、鎌倉を立ち出でゝ、甲州身延山に赴いた。

途中、酒田、車返、大宮を過ぎて、十六日には、內房の里についた。その夜月光天心に澄みわたつて、水聲枕に通ひ、無量の感慨自から胸中に湧いて、眠られざるまゝ、日蓮は、

打臥にさのみは人の寢らねば
月をみのぶに起きかへる哉

と口吟み、其夜はここに圓かなる夢を結むで、其翌日愈甲州に入つた。南部の眞言寺では、住持大輪法印改宗して、日蓮の化導に與り、相俣では、正右衛門の妻に粟飯の供養を受け、さらに進む程に、波木井の南部實長は、自から一門の歸依者を引き連れて、途中まで態々出迎に出て居た。

五三　甲州の巡錫

南部實長は、深く日蓮の德風を思慕し、如何にもして、日蓮の爲に宏大なる

堂宇を建立せむとしたが、堅く制せられて、寧ろ質素なる草庵を營むこととなつた。

一程なく日蓮は、日興、日向の二法弟を伴ふて、各地巡遊の途に上り、六月十七日といふに、漸く波木井に立ち歸つて見ると、西谷なる田代の草庵は既に成つて居た。綠滴る峯巒、流れ清き碧川、白雲の布置、寔に風光明媚なる山間の僻村は、幽なること、宛然太古のやうであつた。

一念三千の妙境に體達して、終日經典を繙き、題目を誦して、閑寂の天地に居住し、只管佛道に仕るふ日蓮の心は、全く人寰を絶ちて居た。日蓮は、

たち渡る身のうき雲も晴れぬべし
絶えぬみのりの鷲の山風

と一首の歌を口吟み、私かに會心のほゝ笑みを漏らしつゝ、胸中深く志を決し、法弟等と共に、粗衣粗食に甘じ、日夜妙宗の修業を怠らなかつた。

五四　望郷の哀愁

ある日日蓮は、法弟二三をひき連れて、身延山の絶頂に立ち登つた。雲か、霞か、房州の岬は、懵乎かるく浮びて居た。日蓮は法衣の袂を長風に弄らせつゝ、暫時故郷の空を眺めて居たが、今は世に在しまさぬ我が父母の上を想ひ出でし時、堪え難き哀愁に襲はれて、覺えず涙は、滂沱として下るのであつた。

げに山中暦日なく、閑寂の天地に隱栖することとなつてから、日蓮は殆ど俗事に心を染めなかつた。さりながら一門の檀越、信徒は日毎に殖えて、供養を運び、衣類を捧げて、其法話に隨喜渇仰の涙をこぼす者、常に其跡を絶たなかつた。

五五　元兵の來寇

時は十月十五日、鳳州の經略史忻都は、忽必烈の命を受け、高麗の總官洪茶丘を先陣とし、總勢二萬五千、軍船九百餘艘を艤して、對馬の國に押寄せた。武勇四隣に匹を見ざる宗資國は、一族郎黨を指揮して、元兵を邀擊し、縱横無盡に力戰苦闘したが、刀折れ、矢盡きてあへなくも、討死したのであつた。

勝ち誇つた敵軍は、放火、殺戮、掠奪の限りを盡くして、更に月の十四日には、壹岐に迫り、次で筑前箱崎に殺到して、砲彈を浴せ、民家を燒き拂ひ、或は老若男女を捕へて、耳をそぎ、眼を抉ぐり、婦女は縛して本船に送り、木の間に煙を認め、兒女の聲を聞けば、直に探し索めて之を屠り、筑前の海岸は忽ちにして修羅の巷となつた。

やがて敵兵は、その掠奪せる財資、米穀を船に搭載して、將に出帆せむとする折柄、大暴風雨俄かに起つて、敵船の覆沒二百餘隻。溺死一萬三千餘人に及むだから、敵は大に驚き、夜陰に乘じて遁げ去つたのであつた。

想へば日蓮が蒙古襲來を豫言してから、丁度六個月、果して他國侵逼の國難が起つた。仍て他宗の人々も、日蓮の先見に服し、今は敵對の志を飜へし、寧ろ、歸伏の色を現はす者さへ、次第に殖へ行くのであつた。

身延山中の冬は、道がに荒凉たるものであつた。が、日毎に一乘妙典の法理を談じて、只管千古無盡の法味を說いて居る中、早くも梅花綻ぶ二月の春となつたので、檀家の人々は、それ〴〵供養の品を齎して上つて來た。さりながら日蓮は、成るべく自營の道を立てむとて、法弟從僕に命じて、山麓に農業を營ましめて居つた。

五六　恩師の訃

時は建治二年三月十六日、圖らずも恩師道善法印入寂せられたとの報傳つた。君を思ひ、親を思ひ、師を思ふ心に厚き大聖日蓮は、涙ながらに筆を執つて、報恩抄を著はし、日向、日實の二人を遣はして、之を其墓前に誦せしめたが、日蓮は其菩提を弔ふ爲、山を出でゝ駿豆二州を行脚布教し、庶民の風を望むで歸依する者、殆ど其數を知らざる程であつた。

五七　所勞と疑獄

十二月になると、よく雪が降つて、身延山中の草堂は、日毎に困難な狀態に落ちて行いた。壁は頽れ、軒は落ち、戸は破れて、風雨の荒らすに委かせ、山路の往來も、暫時杜絶えたので、厨の蓄も盡き始め、その慘憺たる光景は、佐渡の塚原にも劣らぬ程であつた。或日南條時光の許から、芋二駄を寄贈した時。直に認めて送つた日蓮の返書に見るも、その如何に饑寒困窮と戰つて居られたことが克く察せらるゝ。

『去る文永十一年六月十七日に、此山に入り候て、今年十二月八日に至るまで、此山を出づること一歩も候はず。但し八年が間、病と申し、老年と申し、年々に隨て、身よわり、心耄れ候ひつる程に、今年は春より此病おこりて、秋過ぎ、冬に至るまで、日々に衰へ、夜々に彌やまさり候ひつるに、此十餘日は、既に食も止まり、大寒は重く責め候へば、命既にと覺え候處に、此酒、霍蓼を藥として、命もつぎ、身も强く成りて、御經讀みまゐらせ候（畧）是の所勞の身に候へば、久しく此世に候はじ、一定五郎殿に疾く行合ひ奉つりぬ

と覺え候、母より前に見參して、母の嘆き、申つたへ候べく候』（南條時光の母への返簡）

『人に捨てられたる聖の、寒に責められて、如何に心苦しからんと、思ひやらせ給ふて送られたるか、父母に後れしより此來、斯る懇ろの事に逢ひ候事こそ候はね、切めての御志に給びて候かと覺えて、涙せきあへ候はぬぞ。日蓮はわるき者にて候へども、法華經爭でか疎かに在はすべき、麤臭けれど包める金淨し。池きたなけれども、蓮清淨なり。日蓮は日本第一のゑせ者なり。法華經は一切經に勝れ給へる經なり。心あらん人、金を取らんとおぼさば、袋を捨つることなかれ、蓮を愛せば、池をにくむことなかれ』（西山の尼への返簡）

如此く具さに辛酸を嘗められた爲か、不圖下痢に罹かられたので、布敎は、之を日興、日法、日辨、及日秀等に托し、上人は例の如く經を讀み、法を談じて、聊か倦まるゝ所なかつた。

如此にして、妙宗の敎勢は日に益振ひ、士民の歸依するもの、日夜相踵くといふ勢を示したので、日蓮を敵視せる嚴譽、行智の如きは、妬心遣るに所なく、事を構へて訴狀を時宗に送り、さらに生母千田尼、及其女房を煽動して、其信徒を捕縛せしめ、一回の糺明もなく、直に之を土牢の裡に投じた。かくて賴綱は、威嚇の後に之を懷柔せむとし、頻りに其改宗を勸めたが、一人も之に應ずる者もなく寧ろ法華經の爲に死するを以て、無上の光榮とし、三人は從容死に就き、殘り二十一人は久しく鐵窓の下に繫がれた。

この由を傳へ聞いて、人々は何れも涙を垂れて、其死を悼み、ことに日興の如きは、如說修行の人と讃へて、この三士を弔つた。

五八　日蓮の諭告

建治元年四月忽必烈は再び、其臣杜世忠及何文著を遣はし、我日本と和を講せむとしたが、時宗は其無禮を憤り、直に其使者を由比ケ濱に斬らしめ、更に弘安二年六月來朝せる王使、將夏貴、范文虎及其部將周福等を筑前博多の津に於て斬首の刑に處し、直に防禦の手段を講じた。

時は文永十一年の冬。蒙古王は、この報を聞いて大に怒り、十萬餘騎の軍勢を兵船に搭載して、復び我日本を侵略せしむるに至つた。警報鎌倉に達するや、上下爲に震駭し、人心恟々として、寧處なき有樣であつた。法弟檀徒に此光景を見、日蓮の德を稱へて、自から招ける此侵逼難も嘲笑して居たが、日蓮は私かに國家の前途を憂慮し、自から筆を執つて、次の如く、其の法弟檀徒を戒めた。

『小蒙古の人、大日本へ寄せ來ること、我門弟、檀徒中、若し他人に向はゞ、堅く自から、言語に及ぶべからず。若し此旨に違背せば、門弟を離すべき等の由存知する所なり。此旨を以て人々に示すべく候也。

弘安四年辛巳六月十六日　花押

これ以後恩師の言に感じて、復び蒙古襲來の說を口にする者はなかつた。

五九　蒙古復び來寇

弘安四年五月二十一日。元は十萬の大軍を提げて、直に壹岐に迫つた。松浦の鄕士は、直に兵を發して防禦したる甲斐もなく、敵は强奪、殺戮を恣にし、次で對島を屠り、更に筑前に迫つた。

筑紫探題北條實政は、自から兵を指揮して、陣を列ね、其部將大矢野兄弟は、夜陰に乘じて敵艦を襲ひ、火を放つて一千餘人を殺したので、敵は兵船を盡く鐵鎖にて聯ね、以て海戰の便に備へた。

河野通有兄弟は、輕舟を飛して敵船に近づき、檣を倒して敵船に架し、之に賴つて、船中に躍り込み、立ろに數十人を斬り殺し、安達、大友、竹崎、菊池、島津、秋月の諸雄亦よく戰つたので、敵兵は一人として上陸する者はなかつた。

聽て敵船は肥前の鷹島に據つたので、我軍は直に追擊し、數旬の間空しく對陣する中、『敵兵は長門より京都に侵逼し來り、次で東海北海に及ぶであらう』との謠言、早くも京洛の地に擴がつたので、龜山上皇は、深くもこのことを御軫念あらせられ、親しく石清水に行幸せられ、約一晝夜が程、捷利を祈らせ給ひ、その上宸筆を伊勢大廟にさゝげ、御身を以て、國難に殉するであらうと祈らせ給ふたので、我士卒も之を聞いて感奮蹶起し、一人として生還を歸する者はなかつた。

然るに七月朔日に至れば、颶風忽ち起つて、怒濤狂瀾、殆ど施すに術なく、敵船は見る〳〵微塵に飛亂し、纔に三名を殘して、波に浚はれし者幾萬人、伏屍累々海を蔽ふて、光景轉た慘憺を極めた。

かくて三名を本國に歸らしめ、大に兵備を修めて、敵の重來を待つて居たが、竟に復び來らなかつた。この間日蓮は山に在つて、修始敵國降服の祈禱を修し、國家を憂ふるの念、一日も其首を去らなかつた。

六〇　聖者の大抱負

身延山は、何時しか妙宗の靈場となつた。斯くて、弘安元年の初浣から、三箇年に亘る法華經の講話を開いたが、參詣の老若男女は、年毎に增して行つた。

今は堂宇も甚だしき狹隘を告ぐるに至つたから、南部實長の希望で、新たに、十間四方の堂宇を建立し、此年十一月、開堂の供養を行ふたのであつた。

かくて、法華經の行者日蓮の抱負は、益大を加ふるに至つた。一閻浮提第一の法華經を廣宣流布して、一天四海皆歸妙法の實を擧げんと、奮ひ起つた日蓮の意氣は、凛乎として、何者の權威も、尙且つ此を奪ふことは出來なかつた。當時に於ける日蓮の大抱負は、次の斷簡片墨の間にも、容易に此を認め得るであらう。

『一閻浮提第一の本尊、此國に立つべし』（觀心本尊抄）

『戒壇とは王法、佛法に冥し、佛法、王法に合して、王臣一同に三秘密の法を持し、有德王、覺德比丘、其乃往を末法濁惡の末來に移さん時、勅宣並に御敎書を申し下して、靈山淨土に似たる最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべきもの歟。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是れ也』（三大秘法抄）

或は『日本久しく闇夜となる、扶桑終に他國の霜に枯れなんとす……』と云ひ、『日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時也。二十四人は朝に責められ奉つり、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝らせり。二人は王位を傾け奉り、國中を手に握る。王法既に盡きぬ』と記し、或は國々の民の身として、天子の德を奪ひ取るは、下剋上、背上向下、破上下亂等これ也。設ひ如何に世間を治めんと思ふ志ありとも、國も亂れ、人も亡びぬべし。譬へば木の根を

動かさんに、枝葉靜かなるべからず。大海の波荒からんに、船穩かなるべきや』と慨し、或は『日本の武士の中に、源平二家と申して、王の門守の犬二匹候』と記せるが如き、其大義名分を論じて歇まなかつた日蓮の覇氣の如何に偉大なりしことよ。

六一　後事を附囑す

然るに、日蓮は多年の所勞によつて、弘安四年の春から、健康兎角勝れず。身體益々衰弱して、折々認むる書簡の中にも、悲痛なる影を宿すに至つた。

日蓮は、靈山淨土に歸るべき運命の逼つたことを悟つて、三大秘法並に深秘の法義を親しく日興に口授し、我が滅後は汝代つて大法の弘通に力められい。と、更に一通の遺書と、自ら『本門開壇』と記せる一の板本尊とを送つた。

日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に付囑す。本門弘通の大導師たる可き也。國主此法を立てらるれば、富士山に本門寺の戒壇を建立せらる可き也。時を待つ可き而已。事の戒法と謂ふは是れ也。就中、我が門弟等此狀を守る可き也。

弘安五年壬午九月日　　日蓮㊞

血脈次第　日蓮、日興

既に、後事を附囑せる日蓮は、此より身延の山中を出でんと思ひ決め、九月八日、愛馬に跨つて、身延山を發足することとなつた。相隨ふ者、日興以下の法弟、檀越等。

斯くて到る處、法筵を開いて妙宗を談じたが、檀越の人々は、大いに隨喜の涙を垂れつゝ、或は戒を受け、寺院を起し、或は懇ろに供養をなして、只管そ

の及ばざらんことを氣遣つた。

日蓮は、其月十八日、武州荏原郡池上郷に着いたが、深く思ふ所あつて、此地に錫を留むることに決めたのであつた。

て、其翌日、實長の許に次の如き書簡を送つた。

『畏み申候。道の程別事候はず、池上まで付て候。道の間、山と申し、河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、君達に守護せられ進らせて、難なく是まで付て候事。恐入候ひながら悦び存じ候。さては頓て歸り參り候はんずる道にて候へども、所勞の身にて候へば、不定なる事も候はんずらん。さりながら、日本國にそこばく持ち扱ひて候身を、九年まで御歸依候ひぬる御志。申す計りなく候へば、設ひ何處にて死候とも、墓をば身延の澤に立させ候べく候。又栗毛の御馬は、餘り面白く覺え候程に、何時までも失ふまじく候。常陸の湯へ曳かせ候はんと思ひ候が、若し人にも取られ候はん、又其外いたはしく覺え候へば、湯より歸り候はん程、上總の藻原殿の下に預け置きたてまつるべく候に、知らぬ舍人を付け候はば、覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、此舍人を付け置き候はんと存じ候。其やうを御存知のために申候。恐々謹言』

六二　遺物の分配

日蓮は、池上の郷を臨終の地と定めて、靜かに病を養ひながら、尙且日々の勤行を怠らなかつた。

ある日、本門寺の開堂供養を託されて、莊嚴なる式を備へ、訖つて、日蓮は高座に上り、音吐朗々として、立正安國論の大意を述べた。一山の會衆は、涙

を垂れて、隨喜渇仰するのであつた。

日蓮の病狀は、漸次危態に陷つた。さりながら、法弟、檀越の至る毎に、法門を談じて歇まず。死の正に眼前に逼るをさへ知らぬかに見えた。

斯くて、十月十三日には、日朗に對して、日蓮立像の釋尊、及び立正安國論免狀二通を與へ、翌月八日、法弟、檀越一同を枕邊に寄せて、日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の六人を老僧と定め、不惜身命、末法萬年の佛法弘通に努めよと諭し、更に遺骨を身延山中に埋むるやう、懇ろに遺命すれば、法弟齊しく涙を呑んで、師の命を奉ずるのであつた。

斯くて、翌十日には遺物を頒ち、日昭に對しては、手書の註妙經開結十卷、法華經三部要文三卷、本理大綱集一卷を記念として遺し、師弟互に法門の爲め、身命を捧げむことを誓つた。

六三　大聖入寂

十一日、日蓮は法弟の經一麿を枕頭に招いて、親しく其頭を撫でながら、建長五年以來の我閲歷を大まかに叙べ、更に一天萬乘の君に、題目を聞え上げなかつたことを遺憾とし、此よりは日朗を師として、學問修業致した上、必らず京師に入つて、本化妙宗を天聽に達せらるべき旨言含め、軈て一座の衆に向ひ、

『末法五百年の時に際して、漸く開く法の華、抑々一乘法華經は、大聖釋尊の五百塵點劫の間、本因本果の妙行なれば、一念之を信ずる限り、一切衆生は其功德を受くることが出來る。即身成佛とは此所のこと故、邪道を戒め、正義に就て、飽くまで信心堅固でなうてはならぬ』

と、懇ろに敎化し、日蓮自ら壽量品を誦し、衆亦此に和せば、香烟縷々として

一座を繞り、馥郁の氣は堂内に滿ち渡つた。

かくて妙法蓮華經を唱ふる日蓮の聲は次第々々に細りゆきて、十三日辰の刻に垂んとする頃、溫顏微笑を含むよと看るまに、眠るが如く涅槃に入つたのであつた。時に日蓮六十一歳。

法弟、檀越を首め、信徒の人々は、涙ながらに唱題し、翌十四日納棺。それより茶毘所に安んじ、十六日眞骨を寶瓶に約め、二十五日身延山に着いて翌日二七日の法要を行ひ、十二月二日中陰の法會を營んで山を下り、越えて、弘安六年十月一周忌に際し、日蓮眞筆の書跡百四十八通、四十卷を蒐めて目錄を作り、更に三回忌に二百五十九通二十卷を集めて錄外とした。

斯くて、六老僧を首め、日蓮の徒弟、檀越は、祖師の志を繼いで、天下の衆生を救濟すべく、妙法の弘通に力め、日蓮逝いて五十年の後には、夙くも其偉大なる志業の一端を、天下に顯はすに至つた。殊に法弟大覺大僧正妙實の時に及んでは、畏くも、後光嚴天皇には、御宸翰をもつて、日蓮大菩薩の勅號を賜ふたのであつる。

嗚呼！法華經の行者として、南都北嶺の經庫に、萬卷の書を讀破し、幾度か死生の境に出入して、邪宗の折伏に惟れ力め、或は國家に秘政を慨し、蒙古の來襲を豫言し、飽くまで、一切衆生を正直に導いて濟度せんとし、諸經中王、最爲第一の法華經を以て、其生涯を貫ける、我が英雄僧日蓮は、釋尊滅後二千年の末世に生れ、佛法統一の業猶未だ成らざるに、忽焉として此世を去つたが、其偉大なる思想と事業とは、長しへに滅することなく、磅礴として、天地の間

に存するであらう。

六四　立正安國論大要

旅客來り嘆じて曰く、近年より近日に至るまで、天變地夭飢饉疫癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸こる。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半を超へ、之を悲まざるの族敢て一人も無し。然る間或は利劍即是の文を專にして、西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰ぎて法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて百座百講の儀を調へ、あるは秘密眞言の敎に因りて五瓶の水を灑ぎ、あるは坐禪入定の儀を全ふして空觀の月を澄まし、若くは七鬼神の號を書して千門に押し、若くは五大力の形を圖して萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀みて、國主國宰の德政を行ふ。然りと雖も唯だ肝膽を摧くのみにて彌々飢疫に迫り、乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥して觀となし、戸を竝べて橋となす。顧れば二離、璧を合せ、五緯、珠を連ね、三寶世に在まし、百王末だ窮らず、此世早く衰へ、其法何ぞ廢れたる、是れ何の禍に依り、是れ何の誤に由るやと。

主人曰く、獨り此事を愁ひて胸臆に憤悱す。客來りて吾に嘆く。屢談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は法に依つて佛を期する也。而るに今ま神術も協はず。佛威も驗なし。具に當世の體を觀るに、愚にして後生の疑を發す。然れば則ち圓覆を仰ぎて恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。僚ら微管を傾け聊か經文を披くに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に善神は國を捨

て丶相去り、聖人は所を辭して還らず。是を以て魔來り、鬼來り、災起り、難起る。言はざるべからず。恐れざるべからずと。

客曰く、天下の災、國中の難、余獨り嘆くに非ず。衆皆悲めり。今まこの蘭室に入て初めて芳詞を承るに、神聖去辭し、災難竝起るとは、何れの經に出でたるや、其證據を聞かん。

主人曰く、其文繁多にして其證弘博なり。金光明經に云く「其國土に於て此經ありと雖も、未だ曾て流布せず、捨離の心を生じて聽聞せんことを樂はず。亦た供養し尊重し讃歎せず。四部の衆、持經の人を見て亦復た尊重し乃至供養すること能はず。遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず。甘露の味に背き、正法の流れを失ひ、威光及び勢力あること無からしむ。惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん。世尊よ、我等四王竝に諸の眷屬及び藥叉等、斯の如き事を見、其國土を捨て丶擁護の心無けん。但に我等の是王を捨棄するのみにあらず、必ず無量の守護國土の諸天善神も、皆悉捨て去らん。既に捨離し已りなば、其國當に種々の災禍ありて國位を喪失すべし。一切の人衆皆な善心無くして、唯だ繫縛殺害瞋諍のみあり。互に相讒陷し、枉げて無辜に及ばん。疫病流行し、彗星數ば出で、兩日竝び現じ、薄蝕恒なく、黑白の二虹不祥の相を表はし、星流れ地動き、井の內に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず。常に飢饉に遭ひて苗實成らず、多く佗方の怨賊ありて國內を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地に可樂の處あること無けむ」と。大集經に云く、「佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆な長く、諸法も亦た忘失せられん。その時虛空の中に大聲ありて地に震ひ、一切皆な遍く動せんこと水上輪の如くならん。十不善

業道貪瞋痴倍增し、衆生の父母に於ける、之を覩ること獐鹿の如くならん。衆生及び壽命色力威樂減し、人天の樂を遠離して皆な悉く惡道に墜ちん。是の如き不善業の惡王惡比丘我が正法を毀壞し、天人の道を損減し、諸天善神王の衆生を悲愍する者、此の濁惡國を棄てゝ皆悉く餘方に向はん」と。仁王經に曰く、「國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に萬民亂る。賊來りて國を劫かし、百姓亡喪し、臣君太子王子百官共に是非を生ぜん。天地恠異し、二十八宿星道日月、時を失ひ、度を失ひ、多く賊の起ることあらん」と。また云く、「我今まは五眼もて三世を見るに、一切の國王は皆な過去世に五百の佛に侍へしによりて帝王主となることを得たり。是をもて一切の聖人羅漢爲めに彼の國土の中に來生して大利益をなさん。若し王の福盡くる時は一切の聖人皆な爲めに捨去らん若し一切の聖人去らん時は七難必ず起る」と。

（仁王經の七難とは曰く「日月度を失ひ、時節返逆し、或は赤日出で、黑日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光なく、或は日輪一重二三四五重輪現すること一の難となす也。廿八宿度を失ひ、金星彗星輪星鬼星火星水星風星刁星南斗北斗五鎮の大星一切の國主星三公星百官星、是の如き諸星各々變現すること二の難となす也。大火、國を燒き、萬姓燒盡せん。或は鬼火龍火天火山神火人火樹木火賊火あらん。是の如く變恠するを三の難となす也。大水百姓を漂沒し、時節返逆して冬雨ふり、夏雪ふり、冬時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水黑水青水を雨らし、土山石山を雨らし沙礫石を雨らす、江河逆に流れ、山を浮べ石を流す。是の如く變ずる時を四の難となす也。大風萬姓を吹殺し、國土山河樹木一時に滅沒し、非時の大風黑風赤風青風天風地風火風水風、是の如く變ずるを五の難とな

す也。天地國土亢陽し炎火洞然して百草亢旱し、五穀登らず、土地赫然して萬姓滅盡せん。是の如く變ずる時を六の難となす也。四方の賊來りて國を侵し、內外の賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて百姓荒亂し、刀兵劫起せん。是の如く怪する時を七の難となす也)

夫れ四經の文明がなり。萬人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩迷惑の人妄りに邪說を信じて正敎を辨へず。故に天下世上、諸佛衆經に於て捨離の心を生じて擁護の志なし。仍て善神聖人、國を捨て所を去る。是を以て惡鬼外道、災を成し難を致す。

客色を作して曰く「後漢の明帝は金人の夢を悟りて白馬の敎を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す。爾來、上は一人より下萬民に至るまで佛像を崇め經卷を專にす。然れば則ち叡山南都圓城東寺、四海一州五畿七道、佛經星羅し、堂宇雲布す。誰か一代の敎を編し、三寶の跡を廢すと謂はんや。若し其の證あらば委はしく其の故を聞かん。

主人喩して曰く「佛閣甍を連ね經藏軒を竝べ、僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。崇重年舊り、尊貴日に新たなり。但だ法師は諂曲にして人倫に迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辯ずることなし。仁王經に云く、諸の惡比丘、多く名利を求め、國王太子王子の前に於て自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說かん。其王別へずして此語を信聽し橫まに法制を作りて佛戒に依らず。之を破佛破國の因緣となすと。涅槃經に云く云々。法華經に云く云々。文に就て世を見るに誠に以て然り、惡侶を誡めずんば豈に善事を成さんや。

客猶は憤りて曰く「明王は天地に因て化を成し、聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所也。惡侶に於ては明王信ずべからず。聖人

に非すんば、賢哲仰ぐべからず。今ま賢聖の尊重するを以て、即ち龍象の輕からざるを知る。何ぞ妄言を吐きて強ちに誹謗を成し、誰人を以て惡比丘と謂ふや委細に聞かんと欲す。

主人曰く、後鳥羽院の御宇に法然なるものありて、撰擇集を作る。則ち一代の聖教を破し、遍く十方の衆生を迷はす。最後結局の文に云く、夫れ速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且く聖道門を閣きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば正雜二行の中、且らく諸の雜行を抛ちて、選んで應に正行に歸すべしと。こゝに代は末代に及び、人は聖人に非ず。各冥衢に容りて竝に直道を忘る。悲哉曈朦を鼓たず。痛哉、徒に邪信を催す。故に上、國王より下、土民に至るまで、皆な經は淨土三部の外の經なく、佛は彌陀三尊の外の佛なしと謂へり。以て傳教、義眞、慈覺、智證等、或は萬里の波濤を涉りて渡せし所の聖教、或は一朝の山川を回りて崇むる所の佛像、若くは高山の巓に華界を建てゝ以て安置し、若くは深谷の底に蓮宮を起てゝ以て崇重す。釋迦藥師の光を竝るや威を現賞に施し、虛空地藏の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に國主は郡鄉を寄せて以て燈燭を明かにし、地頭は田園を充て、以て供養に備ふ。而るを法然の撰擇に依て、則ち教主を忘れて西土の佛駄を貴び、付屬を抛ちて東方の如來を閣き、唯だ四卷三部の經典を專にして、空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て彌陀の堂に非ればみな供佛の志を止め念佛の者に非れば、早く施僧の懷を忘る。故に佛堂零落して瓦松の烟老ひ、僧房荒廢して庭草の露深し。然りと雖も、各護惜の心を捨てゝ並に建立の思を廢す。是を以て住持の聖僧行きて歸らず。守護の善神去りて來ることなし。是れ偏に法然の撰擇に依る也。悲哉。數十年の間、

百千萬の人魔緣に蕩かれて、多く佛敎に迷へり。傍を好んで正を忘る。善神怒をなさゞらんや。圓を捨てゝ偏を好む。惡鬼便を得ざらんや。彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁ぜんには如かず。（中略）

客則ち和ぎて曰く「經を下だし僧を誘すること一人として論じ難し。然り而うして大乘經六百三十七部二千八百八十三卷並に一切諸佛諸菩薩及び諸の世天等を以て捨閉捨抛の四字を載す。其詞勿論也。其文顯然也。但し災難の起ること撰擇に因るの由盛に其詞を增し、彌々其旨を談ず。所詮天下泰平國土安穩は君臣の樂む所、士民の思ふ所也。夫れ國は法に依て昌へ法は人に因て貴し。國亡び人滅せば、佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし。若し災を消し難を止むること術あらば、聞かんことを欲す。

主人曰く「余は是れ頑愚にして敢て賢を存ぜず、唯だ經文に就て聊か所存を述べん。抑も治術の旨、內外の間、其文幾何ぞや。具に擧ぐると難し。但だ佛道に入て屢々愚案を回らすに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば、國中安穩にして天下泰平ならん。即ち涅槃經に云く云々。仁王經に云く云々。夫れ經文顯然たり。私詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を謗るものは無量の五逆に勝れり。故に阿鼻大城に墮して永く出期なけん。涅槃經の如くんば、たとひ五逆の供を許すとも謗法の施を許さず。蟻子を殺すものは必ず三惡道に落つ。謗法を禁むるものは定めて不退の位に登る。法華涅槃の經敎は一代五時肝心なり。其禁實に重し。誰か歸依せざらんや。而るに謗法の族、正道の人を忘れ、剩へ法然の撰擇に依て彌々愚痴の盲瞽を增す。是を以て或は彼の遺體を忍びて本畫の像に露はし、或に其妄說を信じて恭言

の模に彫り、之を海内に弘め、之を墩外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其家風、施す所は則ち其門弟なり。然る間或は釋迦の手指を切りて彌陀の印相を結び、或は東方如來の雁字を改めて西土教主の鷲王を居へ、或は四百餘回の如法經を止めて西方淨土の三部經となし、或は天臺大師の講を停めて善導講となす。此の如き群類其れ誠に盡し難し。是れ破佛に非ずや。是れ破法に非ずや。是れ破僧に非ずや。此の邪義は則ち撰擇に依る也。嗟呼悲哉。如來誠諦の禁言に背くこそ、哀れなり。此侶迷惑の粗語に隨ふことや、早く天下の靜謐を思はゝ、須く國中の謗法を斷つべきなり。

客曰く「若し謗法の輩を斷じ、若し佛禁の違を絶せんには、彼の經文の如く斬罪に行ふべき歟。若し然らば殺害相加へ罪業何とかせんや。則ち大集經に云く、頭を剃り、袈裟を着せば、持戒と毀戒と、天人彼を供養すべし云々と。

謗法を誡るに似て既に禁言を破す。此事信じ難し。何如か意を得ん。

主人曰く「客明かに經文を見て猶ほ此言をなす。心の及ばざる歟。理の通せざる歟。全くは佛子を禁むるに非ず。唯だ偏に謗法を惡む也。（下略）

四六　日蓮と婦人

女人と成佛

意氣と權威と彈力と、この三つのものを把持して、王公と戰ひ、貧と戰ひ、宗門と戰ひ、風潮と戰ふて、怒濤逆まく我國の思想界に、一大帝國を建設した千古の英雄日蓮は、如何に女人を觀て居たか、こは寔に興味ある問題で、また其半面を語れる情の歴史である。

日蓮が旭の森に、南無妙法蓮華經の題目を高唱して、妙宗の一派を開いた時、

女人の爲に、特に『女人住生鈔』なるものを書いた。今試みに其一節を揭げて、日蓮の婦人に對する觀察と、同情と、信念とを批判し見むか。

『されば（上略）二十八品中疑なき其中にも、藥王品の後五百歲の文と、勸發品の後五百歲の文とこそ殊に珍らしけれ。勸發品には此文三處に在り。三處俱に後五百歲二千歲年已後の男女等に亘る。藥王品には、此文二處に在り。一處には、後五百歲に法華經の南閻浮提に流布すべき由を說かれて候。一處には、後五百歲の女人、法華經を以て大通智勝佛の第九の王子阿彌陀如來の淨土、久遠實成の釋迦如來の分身の阿彌陀、本門同居の淨土に往生すべきことを說かれたり。

佛は五重の煩惱の雲晴れ、五眼の眼曇なく、三千大千世界、無界世界、過未來現在を掌の中に照知照見させ給ふが、後五百歲の閻南浮提の一切の女人、法華經の一字一點も信じて行せば、本時同居の安樂世界に往生すべし。と知見し給けることの貴く賴もしきこと言ふばかりなし。女人の御身として、漢の李夫人、場貴妃、王昭君、小野小町、和泉式部と生れさせ給ひたらむより も當世の女人は嬉しかるべきこと也。彼等は寵愛の時には、珍らしかりしかども、一期は夢の如し』（下略）

若し夫れ法念の淨土宗が、熱心なる婦人の歸依者によりて、其勢を得たことを知らむ者はこの一節が、婦人に對して、如何に光明と、希望とを與へたかは問はずして、自から明でかあらう。法華經題目抄の後半にも、數次之を說きて、

『佛滅後一千五百年（中略）天台大師と名乘りて、女人は法華經を離れて、成佛すべからずと定め給ひぬ』

と語り、次で、

『一切女人の敵は、虎狼よりも、山賊よりも、海賊よりも、父母の敵よりも、法華經を敎へずして、念佛を敎ゆる人々こそ、女人の敵なれ』

と言ふ所、日蓮の面目髣髴として楮墨の表に躍如つて居る。

その後女人の成佛については、機にふれ事に方つて、屢說かれて居るが、四十四歳の時、上野太郎時光の妻某の爲に著はした『藥王品得意抄』の中にも、巧妙なる比喩を以て、

『華嚴經等の一切經は、闇夜の星の如し。法華經は、闇夜の月の如し。法華敎を信ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照すが如く、深く信ずる者は、滿月の闇夜を照すが如し。月なくして但だ星ある夜には、强力のかたましき者なんどは行步すと雖、老骨の者女人なんどは、行步に叶はず。滿月の時は、女人老骨なんども、行步自由なり。

諸經には菩薩大根生の凡夫は、たとひ得道なるとも、二乘凡夫惡人女人、乃至末代の老骨の懈怠無戒の人々は、往生成佛不定なり。法華經は然らず。二乘惡人女人等猶成佛す。何ぞ況むや菩薩大根性の凡夫をや。又月、宵よりも光まさり、春夏よりも秋冬光あり。法華經は正像二千年より、末法には殊に利生あるべき也。

と說き、さらに一轉語を下して、自から、『殊更女人往生を說くは何故ぞ』と問ひ、之に答へて曰く、

『佛意測り難し。此義決して難き乎。但だ一の料見を加ふれば、女人は衆衆の根本。破國の源也。故に內典外典に多く之を禁しむ。外典を以て之を論ずれば、三從あり。內典を以て之を論ずれば、五障あり。銀色女經に曰く、三

世の諸佛の眼は、大地に墮落すとも、法界の諸〳〵の女は、永く成佛の期なしと、さるにては、女人の御身を受けさせ給ひては、縱令皇后三公の位にそなはりても、何かすべき。善根佛事をなしても、由なしとこそ覺え候へ。而るを此法華經の藥王品に、女人の往生を許され候ぬること、又不思議に候。彼經の妄語か。此經の妄語か。いかにも一方は妄語たるべき乎。若し又一方妄語ならば、一佛に二言あり。信じ難し。但し「無量義經」の「四十餘年未顯眞實」の文を以て思へば、佛は「女人は往生成佛す可からず」と說かせ給ひけるは、妄語と聞へたり。世間の賢人も但だ一人ある子が、不思議なる時、或は失ある時は、起請を書き、誓を立つると雖、永く子たる可からざるの理、命終の時に臨むで之を許す。然りと雖、賢人にあらずと云ふ可からず。又妄語せるものとは言はず。佛も亦是の如し』

三界に家なく、女人は成佛すべからずと說き聞かされて、悲しさ、賴る邊なさ、心細さに憂き年月を送つて居た當時の婦人が、この福音を聞いて、如何に喜むだかは、殆ど想像に餘りがある。

信仰と夫婦關係

夫婦と信仰との關係につきては、上人は常に、

第一　女は夫の信仰に同化し、共に信仰の生活を送れと云つて居らるゝ、かの四條金吾――龍口法難の夜、日蓮の死に殉せむとした金吾賴基の妻に送られた上人の書束は、蓋し其の一例であらう。

左衞門殿（金吾）は、俗の中にては、肩を並ぶべき者なき、法華經の信者也。之に相つれさせ給ひぬるは、日本第一の女人也。法華經の御爲には、龍女と

こそ佛は思召し候はめ。云々。

が、若し、

第二　その嫁せむとする夫が、未だ妙宗に歸依せざる者なる時は、寧ろ之を避けよと敎へられて居るやうである。かの日頂の母日妙に與へられたる書柬には、明かに其意味が含まれて居る。曰く、

『如何なる男を夫させ給ふとも、法華經の敵ならば、隨ひ給ふ可からず。いよ〳〵强盛の御志あるべし』

さりながら、

第三　既に嫁したる婦人に對しては、縱し其夫が、法華經を信ぜざるも、自から勵みて、その信仰を墮すなと誨へ、

第四　夫を亡ひ、妻を先立てたる者に對しては、滿腔の同情を以て、

昔儒童菩薩は、五莖の蓮華を買ひ取り、定光菩薩を供養し給き。女人あり瞿夷と名く。二莖の蓮華を以て、自から供養して曰く、『凡夫にてあらむ時は、世々生々婦夫とならむ。佛ならむ時は、同時に佛となるべし』この誓朽ちずして、九十一却の間夫婦となる云々。

などの例をひき、現在の愛情と、過去の因緣と、將來の理想とを一貫して、夫婦關係の重ずべきを敎へられた。

婦人より得たる慰籍

當時の婦人が、日蓮によりて、慰籍を得、また之によりて、前途の光明を望み得た如く、日蓮も亦、婦人によりて、慰められ、勵まされ、勞はられたこと、決して其事例に乏しくない。上人が伊豆に流された時、船守彌三郎の妻が、密

かに焚いてくれた一椀の晩食は、如何に其心を慰めたか、如何に其心を勵ましたか、願くば之を上人の手束に見むか。

わざと使を以て粽、酒、干飯、山椒、紙、品々給ひ候畢んぬ。又使申され候は、御かくさせ給へと申上候へど、日蓮心得申すべく候。日蓮去五月十二日流罪の時、その津に着きて候ひしに、未だ名をも聞き及びまいらせず候所に、船よりあがり苦しみ候ひし所に、懇ろにあたらせ給ひし事は、如何なる宿習ならむ。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるか、今末法に船守の彌三郎と生れかわりて、日蓮を憫み給ふか。縱令男はさもあるべきに、女房の身として、食を與へ、洗足、手水、その外さも事懇ろなること、日蓮は知らず不思議とも申すばかりなし。特に三十日あまりありて、內心に法華經を信じ、日蓮を供養し給ふこと、如何なることの由なるや。かゝる地頭萬民、日蓮を憎み嫉むこと鎌倉よりも過ぎたり。見る人は目をひき、聞く人はあだむ。ことに五月のことなれば、米も乏しかるらむに、日蓮を內々にてはぐくみ給ひしことは、日蓮が父母の、伊豆の川奈と云ふ所へ生れかわり給ふ乎。法華經第四に云く『及淸信士、供養於法師』云々。法華敎を行せむ者をば、諸天善神或は男となり、或は女となり、形を變へ、さま〳〵に供養して助くべしと云ふ經文あり。彌三郎夫婦の士女と生れて、日蓮を供養すること疑なし。（中略）

然らば夫婦二人は、敎主大覺世尊の生れかわりて、日蓮を助け給ふか。伊東と川奈の道の程は近く候へ共、心は遠し。後の爲に文を參らせ候ぞ。人に語らずして心得させ給へ。少しも人知るならば、御爲惡かりぬべし。胸の中に置きて語り給ふことなかれ。あなかしこ。あなかしこ。南無妙法蓮華經。（六

月二十七日）

日蓮が父母の、伊東の川奈に生れ變り給ふ乎云々といふあたり、如何に其情の濃にして、如何に感謝の念切なりしかを見よ。思ふに彌三郎の妻が送れる文筥の上には、必ずや感謝の涙が、あり〳〵と其痕を印して居たに相違ない。

日頂の母日妙は、日蓮を信ずること神の如く、佛の如く、一日相見ざれば、食、喉を下らずといふ程であつたが、日蓮の佐渡に流さるゝや、敬慕の情禁じ難く、意を決して鎌倉をのがれ出で、年若き女の身でありながら、山賊野武士の出沒頻りなる木曾の山路を越へ、信越の荒野を辿つて、やう〳〵寺泊に出で、ここに又六十里の荒波を渡つて、やつと佐渡が島根に赴き、荒凉たる塚原の草庵に相見えて、互にその不遇を泣いたことがある。後年其當時を追想し、消息の文に之を記して曰く、

『玄奘は西天に法を求めて、十七年十萬里に至れり。傳敎御入唐但だ二年なるも、波濤三千里を隔てたり。此等は男子也。上古也。賢人也。聖人也。未だ聞かず女人の佛法を求めて、千里の路を分けしことを。龍女が即身成佛も、摩訶波闍波提比丘尼の記別にあづかりしも、知らず權化にやありけむ。又在世のこと也。（中略）

『今當に知るべし。須彌山を戴きて、大海を渡る人を見るとも、この人を見るべからず。砂を蒸して飯となす人を見るも、此女人を見る可からず。日本第一の法華敎の行者なり。故に名を一つつけたてまつりて、不經菩薩の義になぞらへん。日妙聖人』（中略）

『相州鎌倉より北海佐渡の國、其間一千餘里に及べり。山海遙かに隔て、山

は嵯峨、海は濤々、風雨時に從ふことなし。山賊海賊充滿せり。宿々泊り〳〵、民の心虎の如し。犬の如し。現身に三惡道の苦を經るか。其の上當世は世亂れ、去年より謀反の者國に充滿し、今年二月十一日合戰。其より今五月の末、未だ世間安穩ならず。而も一人の幼子あり。父も賴しからず。離別既に久し。かた〳〵筆も及ばず。心辨へがたければ、とゞめ畢りぬ』

以て當時の訪問が、如何に日蓮の心を動かせしかを知るに足るであらう。

この日妙は、日蓮の文に『父も賴しからず。離別既に久し』と云へる如く、若うして夫に別れた不幸薄命の人で、其後身延山にも幾たびか日蓮を訪れて、纔かに世の物憂さを忘れて居たが、蒙古再來の風說身延に傳るや、上人は頑是なき幼兒を抱えて、うら若き女の身が、如何ばかり心寂しく、又賴りなく思つて居るだらうと思ひやられ、ここに激勵の文を送られた。

『御勘氣を蒙りて、佐渡の島まで流されしかば、問ひ訪ふ人も無かりしに、女人の御身として、かた〳〵御志ありし上、我と來り給ひしこと、うつつならざる不思議なり。其上今の詣で、又申すばかりなし。定めて神も守らせ給ひ、十羅刹も御憐みさしますらむ』（下畧）

さりながら、若き女の再緣すべきことあらむかとも慮りて、

『如何なる男を夫させ給ふとも、法華經の敵ならば、隨ひ給ふべからず。いよ〳〵强盛の御志あるべし』

と注意し、最後に、

『いかなる事も出來候はゞ、是へ御渡りあるべし。見たてまつらむ。山中にて共に饑へ死にし候はむ。又乙御前こそ大人なしくなりて候らめ。いかにさかしく候はむ。又々申すべし。

神とも仰ぎ、佛とも賴む上人の口より、『共に餓死にし候はむ』との語を聞く。血あるもの誰か其意氣に感せざらむ』涙ある者誰か其情の深きに泣かざらむ。思ふにかの女の如きは、必ずや、身延の天を仰いで、其姿を伏し拜むだであらう。其文殼を抱いて、その難有さ、勿體なさ、辱なさに、幾夜か泣き明したであらう。當時日蓮の信徒が何れも其情誼に感じて、上人の爲には、『山川踰ゆべく、凌辱忍ぶべく、鴟茶笑つて仰ぐべし』との大信念を懷いたのも、決して偶然ではない。決して怪むにも足らぬ。

佐渡にても一人の献身的女を得た。そは千日尼とて、日蓮が病重りて後の手束に、

『慈母の佐渡の國に生れ替らせ給ひて、日蓮が命を助け給ふか』

と云つた阿佛房の妻である。千日尼は、迫害の餘り烈しき故、夫の荷へる槇に身を潜めて、夜陰密かに塚原の草堂に參詣し、數次日蓮を慰めたこともあり、身延時代にも、年々種々の品を送つて、其乏しきを補つて居た。或年阿佛房が訪ね來た時、之に托して送つた上人の手束には、あり〳〵と切なる感謝の情が現はれて居る。

『佐渡の國より此甲州まで、入道の來たりしかば、不思議と思ひしに、また今年も來り、菜摘み、水汲み、薪こり、檀王の阿志仙人に仕へしが如くにして、一月に及びぬる不思議さよ。筆もちて盡し難し。これ偏に又尼君の御功德なるべし。又御本尊一幅書きて參らせ候。靈山淨土にては、必ず行き合ひたてまつるべし。恐々謹言。

また或時の文に、

『夢か幻か、尼御前の姿をば、見參らせ候はねど、心をば是に留め置き候。日蓮を戀しく御座し候はゞ、日月を拜がませ給ふべし。何時なく日月に影を浮ぶる身なればなり』

と。一代の人。一代の女人。かれを憎み、かれを呪ふに方り、千日尼獨り身を抽でゝ、法華經の行者を待つ。日蓮が之を目して、『呂后の沛公に於けるが如し』と云ふたのは、蓋し其親切が身に泌みて、忘られなかつた爲であらう。

如此くにして、日蓮の行く所、必ず女あり。而して其女や、何れも献身的の人。不惜身命の人。あゝ日蓮は寧ろ幸福の人であつた。

法華經の行者　日蓮上人（大尾）

大正六年六月五日印刷
大正六年六月十二日發行

▲日蓮上人▼
〔正價金五拾錢〕

著者　松川二郎　東京市日本橋區鐵砲町六番地
發行者　磯部辰次郎　東京市神田區今川小路一丁目四番地
印刷者　塚田重五郎　東京市神田區今川小路一丁目四番地
印刷所　塚田印刷所

發行所　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部甲陽堂　振替東京一五〇五六番

不許複製

ニ1177

文學博士 久米邦武先生著 **國史八面觀** 磐余朝奈良朝 中判總布製 各一冊 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

高島平三郎先生著 **修養二十講** 中判總布製 全一冊 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 井上圓了先生述 **哲窓茶話** 菊判半截 二百八十六頁 正價金四拾錢 送料金六錢

江原素六先生著 通俗講話 **浮世の重荷** 中判總布製 全一冊 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學士 栗原基先生 赤井米吉先生 共譯 ワグネー ミラー ジョウダン 原著 **スポルヂヨン說教集** 中判洋裝 三百二十頁 正價金六拾錢 送料金六錢

笛岡清泉著 **安心立命論** 菊判洋製 三百頁 正價金六拾錢 送料金八錢

文學士 鈴木暢幸先生著 **禪の手びき** 中判總布製 全一冊 正價金六拾五錢 送料金八錢

川田正澂先生著 **謠曲講義** 中判特製 五百二十六頁 正價金壹圓參拾錢 送料金八錢

文學博士 遠藤隆吉先生閲 高部滕太郎先生譯 **教へる人學ぶ人** 中判總布製 全一冊 正價金壹圓 送料金八錢

ロツス社會心理學 中判總布製 五百四十頁 正價金壹圓四拾錢 送料金八錢

終